

濱灣、仰見月光、作歌一首
珠洲能宇美爾、安佐比良伎之底、許藝久禮婆、
奈我波麻能宇良爾、都奇底理爾家里。

右件詞者、依春出學一巡行諸郡、當時
所屬目之作之、大伴宿禰家持。

上記の歌とその詞書の中に氣多大神宮之
乎路・波久比能海・能登郡・熊來村・能登の島
山・鳳至郡・饒石河・珠洲能宇美・太沼郡・長濱
灣の十二地名を包含してゐる。故に是等の地
名を基礎として、家持の巡遊した経路を考へ
ることが出来る。

(二)越登賀三州志の説―富田景周はその著越
登賀三州志に於いて、家持は曩に越中新川郡
の延槻川を渡り、志乎路を経て初めて能登に
入り、氣多神社に赴せんが爲羽咋の海邊を
進み、更に轉じて今の鹿島郡七尾附近と思は
れる能登郡香島津から舟を漕ぎして熊來村に航
し、陸行して鳳至郡饒石河を越え、珠洲郡に
入つた後、半島の西岸外浦に沿うて南航し、
太沼郡に還り、長濱浦に泊して國府に歸館し
たとしてゐる。著者はこの太沼郡を、契沖の
萬葉集代匠記に基づいて、羽咋郡大海郷の誤
寫なりと斷じ、長濱灣は鹿島郡府中以東、太
田・矢田などの海岸で、和名抄にいふ長濱郷
であると解してゐる。

(三)越中萬葉遺事の説―森田平次はその著越
中萬葉遺事に別の説を爲してゐる。曰く、家持
は越中を巡行した後、一旦射水郡の國府に入
り、水見から志雄越を過ぎて羽咋郡に出で、
氣多神宮に參拜し、外浦の海濱神代・福浦な
どを経て内浦に出で、香島津から發船して能
登島の抱擁する灣内を航し、熊來村即ち今の
中島に著し、再び陸路外浦に出で、鳳至郡饒

石河を涉り、鈴の御崎附近に至り、御崎又は
鹽津から海に航して、外浦を羽咋郡に漕ぎ歸
り、長濱灣に碇泊して大海郷に着し、志雄の
山路を越えて射水の國府に歸つたとしてゐ
る。この論に於いては、香島津を七尾の浦續
きにて、寧ろそれよりも北方に求めんとし、
長濱灣を羽咋郡富來の中濱であるとするもの
である。

(四)前二説の批判―前二説は略類似してゐる
が、家持巡國の目的が出學の事務を監査する
にあるのだから、各郡家を過ぎる必要がある
のであらうが、その点に考慮を拂つてゐない
のみならず、歸程の水路を外浦としたのは大
きな錯誤かと思はれる。

(五)第三説―是に於いて第三説が必要である
が、その考察はかうである。家持は志雄越か
ら羽咋郡に入ると、先づ羽咋の海即ち現今よ
りは非常に大きかつた呂知瀨の南岸に沿うて
羽咋に至りその郡家を訪ひ、更に北に進んで
氣多神宮に詣で、神宮から呂知瀨の北岸に沿
うて七尾附近の香島津に達した。能登郡の郡
家はこの線上にあつた。香島津から船を漕ぎ
て熊來即ち今の中島に上陸し、半島を横斷し
て富來に出で、劍地に入る所で饒石川を渡
り、黒島から門前往來又は海岸に近い路線の
一を取つて輪島附近に至つた。その中段附
近に郡家があつたと思はれるからである。そ
れから海岸に沿うて時國に至り、鈴屋から東
折して正院にあつたであらう珠洲の郡家に至
つたと見える。正院から歸路海に浮んで、能
登島の外側を通過し、地理學者のいふ鹿島半
島の東側長濱浦で月光を仰いだのである。鹿
島半島の西側を長濱浦とするものもあるが、

吾人は家持が故らに必要のない七尾灣内を迂
航したとは思はぬからその説を取らぬ。長濱
浦からは越中射水郡の阿努郷に着き、布勢の
湖口に舟を棄て、布師の國府に歸つたのであ
らう。萬葉集に大沼郡と書いたのは、太沼郷
の誤で、それは阿努郷と同じとする説に従
ふべきである。

オホトリキ 大鳥居 羽咋郡富木院に屬す
る部落。能登名跡志大福寺の條に、『昔は七堂
伽藍の寺、大寶年中泰澄大師開基の大地に
て、富木院内は不殘社領なりしといへり。其
時鳥居ありし所を、今も大鳥居村といふ。』と
ある。

オホナ 大南 羽咋郡町(部落名)のうちの
小字。
オホナガサキ 大長崎 鳳至郡皆月の北方
にある岬。
オホナガノ 大長野 能美郡德橋郷に屬す
部落。

オホナダ 大灘 羽咋郡德田の内の小字。
オホナダレザン 大額山 能美郡風嵐部落
から西方の山。高さ八三三米。山體侏羅系。
オホナンチダケ 大汝岳 白山記に御前岳
を叙したる次に、『北並峙高峯。其頂住大明
神。號高祖太男知。阿彌陀如來垂迹也。建
立一間一面寶殿。安置五尺金銅像。其前立
一丈錫杖。』(依末代聖人語)『緊一尺八寸鐔
口。』(願新保額三十一)とある。この峰は
白山三峰の一つで、大己貴岳と名付けたの
を、越南地にも大汝にも作り、又尾添側の先
達は内陣といひ、牛首側の先達は奥院と稱
する。神祠は、寛政中の調書に『奥院越南知
社見付七尺梁九尺六寸』とあり、今もその通

りで、白山奥宮の攝社大己貴神社とせられて
ゐる。大汝岳は御前岳や劍ヶ峰よりも後に外
輪山壁を破つて噴出した角閃安山岩の熔岩で
ある。高さ二六八〇米。今地圖に大汝峰と記
する。
オホニシ 大西 羽咋郡富木院に屬する部
落。
オホニシカゲツ 大西荷月 鹿島郡高島
人で、寛政十二年に生まれた。俳諧を卓次に
學び、嘉永二年立几して正花堂と號した。明
治二十年旬集拾かへり集を編み、二十三年九
十三歳を以て歿。
オホニシキンエモン 大西金右衛門 元織
田信長に仕へて瀧澤氏を稱したが、信長の死
後前田利家に仕へ、天正十二年には末森城に
在つて武功があり、後大坂の役に使番を勤
め、祿千石に至つたが、子なくして斷絶した。
オホニシヤマ 大西山 河北郡津幡の北方
沃野中に突起する丘陵である。遠く金澤と河
北潟とを望み、近く津幡の人家を眼下に見る
景勝の地である。
オホニシヤマ 大西山 鳳至郡西山の内の
小字。
オホヌカ 大額 石川郡富樫庄の内に屬す
る部落。
オホヌカゴウ 大額郷 本願寺派諸寺系圖
に、元應二年石川郡大糠郷に大額坊が草創せ
られたことを記してある。大糠郷は大額郷
で、古くは額七ヶと稱して、大額・額谷・額乙
丸・額新保・額三十疋・額助丸・額栗林があつた
といふから、それをさしたのであらう。後世
では富樫庄の内である。但し額三十疋は三十
疋となり、額助丸と額栗林は廢絶した。